



## 平成30年 熱中症による救急搬送

平成30年4月30日～9月30日

### 1 救急状況

平成30年（4月30日から9月30日）の小野市における熱中症による救急搬送人員は70名で、昨年同期（42名）の搬送人員よりも28名多くなりました。

救急搬送された方を年齢別でみると、高齢者（65歳以上）が29名（42%）と最も多く、次いで、成人（18歳以上65歳未満）が22名（31%）、少年（7歳以上18歳未満）が17名（24%）、幼児（0歳以上7歳未満）が2名（3%）の順となっています。

また、救急搬送された方を傷病程度別でみると、重症（入院が3週間以上のもの）が6名、中等症（入院が必要で入院加療が3週間未満のもの）が15名、軽症（入院を必要としないもの）が48名、死亡が1名という結果となりました。

### 2 気象状況

この期間中に、最高気温が30℃を超える真夏日が59日（昨年は60日）で、35℃以上の猛暑日が15日（昨年は0日）あり、7月24日に今年の最高気温36.9度を記録しました。

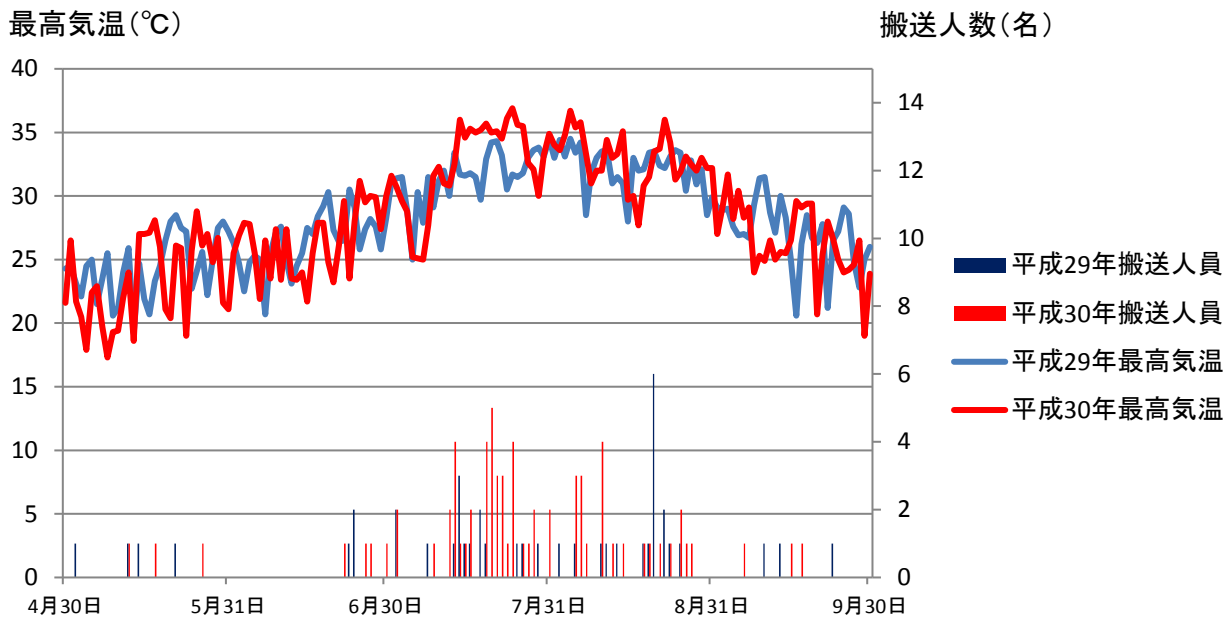
今年は気温の高い日が続きました。

※ 調査期間は、総務省消防庁の指定した期間です。

※ 気象観測データは、小野市消防本部気象観測装置によるものです。

### 3 最高気温の比較と熱中症による救急搬送人員

下記のグラフは、今年と昨年の4月30日から9月30日までの最高気温と熱中症による救急搬送人員を比較したものです。



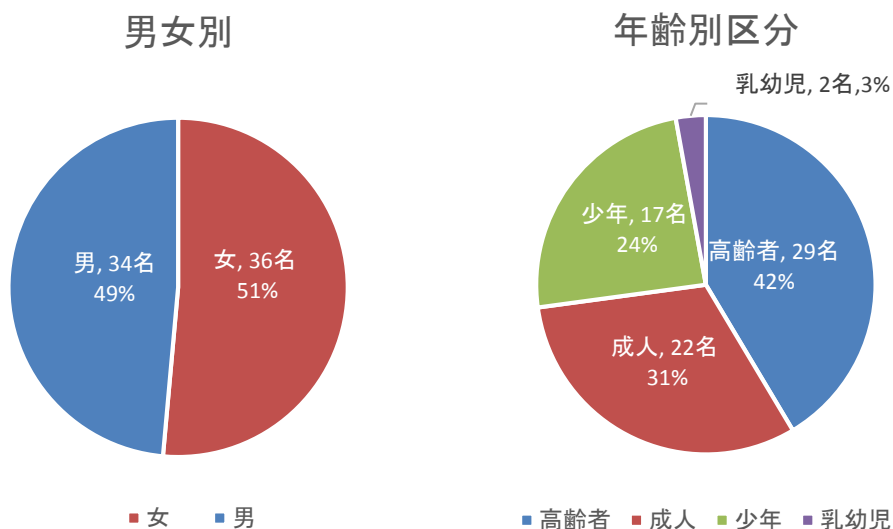
#### 【今年の特徴】

7月9日から37日連続真夏日を記録し、気温の高さに比例して救急搬送人員も増加しました。

### 4 熱中症による救急搬送者の内訳

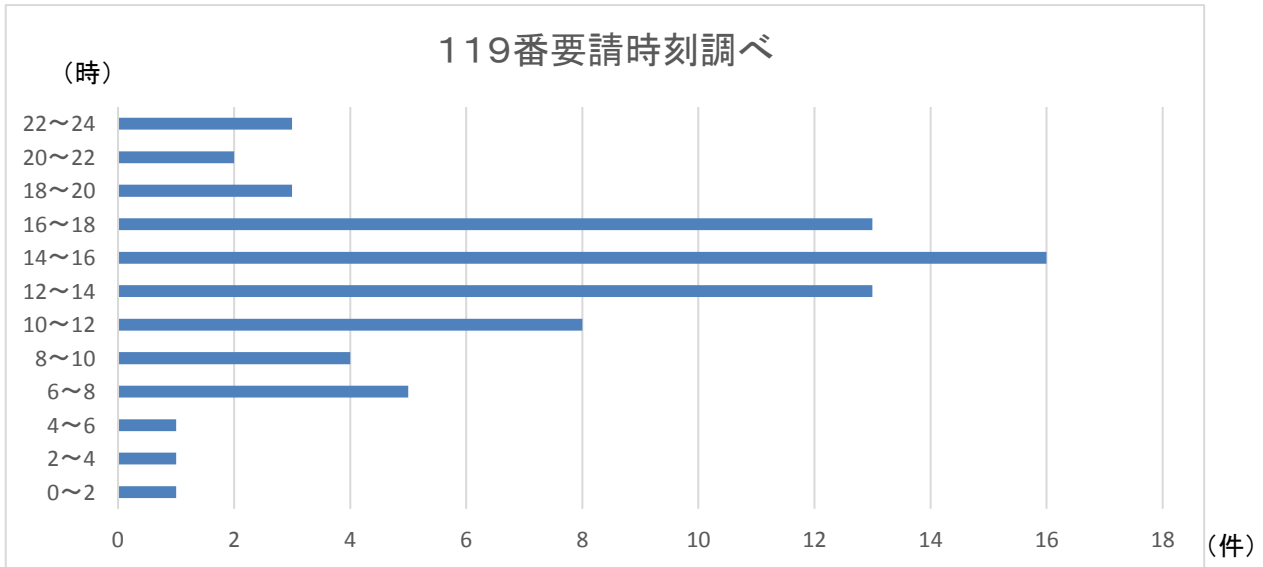
#### (1) 性別と年齢

熱中症で搬送された70名を男女別で見ると、男性が34名で女性が36名となりました。また、年齢別で見ると、高齢者の割合が全体の4割以上を占めております。



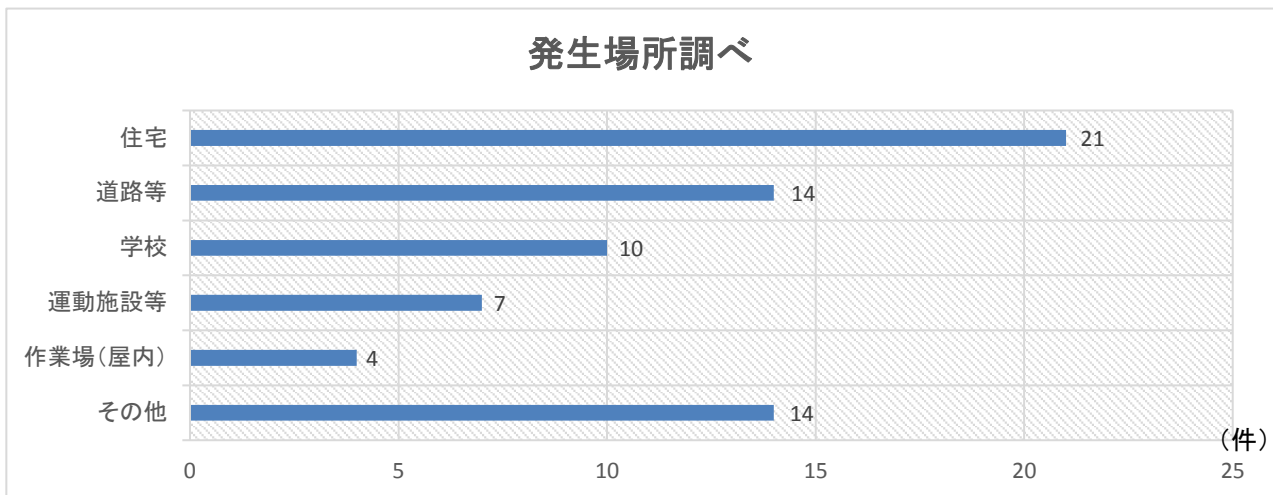
## (2) 救急要請時刻

熱中症により119番通報された時刻をみると、救急要請が一番多いのは14時から16時です。日中の比較的気温が高い時間帯に多い結果となりました。なお、夜中でも熱中症による救急要請がありました。高温となった室内で就寝中にも発生すると考えられます。



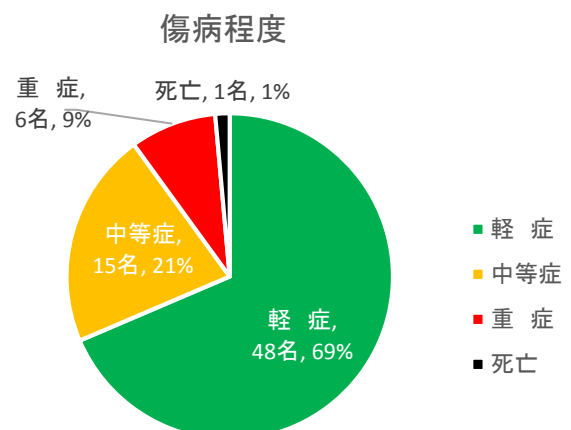
## (3) 発生場所

発生場所が一番多いのは、「住宅」で21件となっています。屋内で過ごしていても、熱中症は発生します。



## (4) 救急搬送者の傷病程度

救急車で病院へ搬送された70名のうち48名(69%)が初診時軽症、15名(21%)が中等症、6名(9%)が重症、1名(1%)が死亡と診断されました。



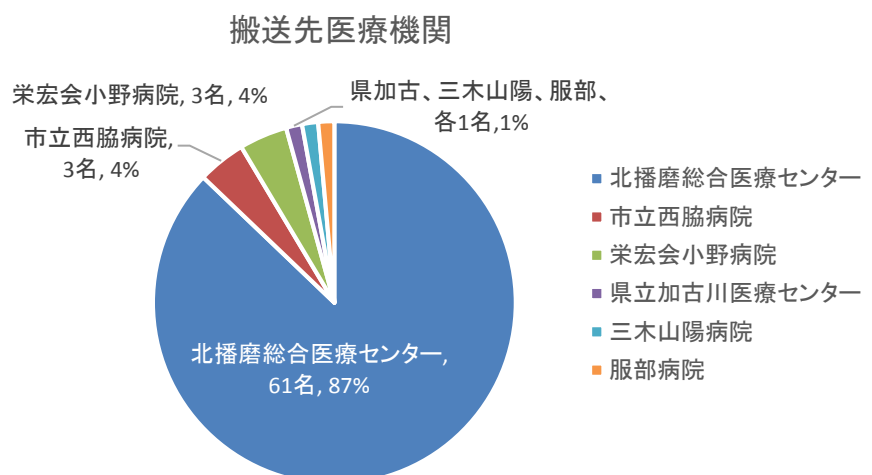
(5) 熱中症に伴う入院率

熱中症による入院率については、高齢になるほど入院率が高くなります。

年齢 (歳)	搬送人員 (名) (A)	初診時傷病程度(名)				入院率 (B)/(A)
		死亡	重症	中等症	軽症	
0~4	2				2	0.0%
5~9						
10~14	14		1	5	8	42.9%
15~19	4				4	0.0%
20~24	3				3	0.0%
25~29						
30~34	1				1	0.0%
35~39						
40~44	1				1	0.0%
45~49	3		1		2	33.3%
50~54	2				2	0.0%
55~59	7			1	6	14.3%
60~64	4			1	3	25.0%
65~69	3				3	0.0%
70~74	6		1	4	1	83.3%
75~79	8	1		1	6	12.5%
80~84	6		1	2	3	50.0%
85~89	5		1	1	3	40.0%
90~95	1		1			100.0%
95以上						
合計	70	1	6	15	48	30.0%

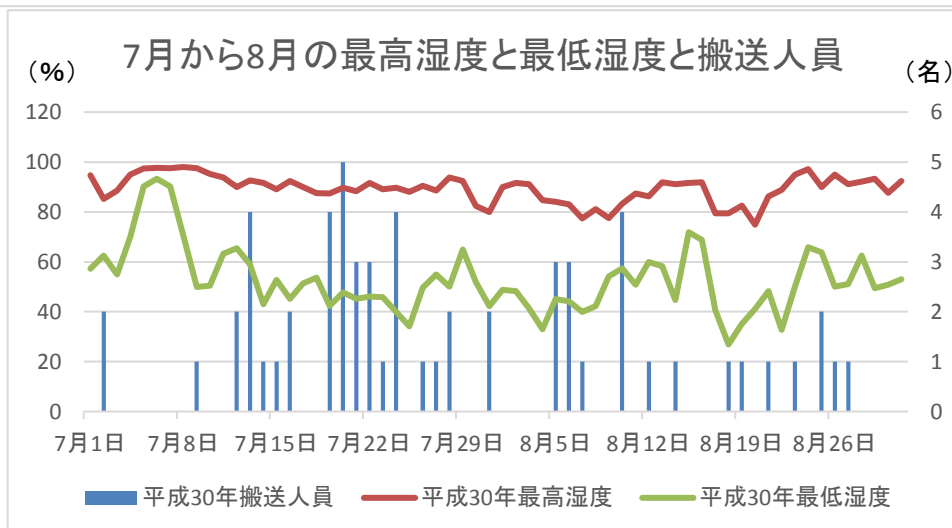
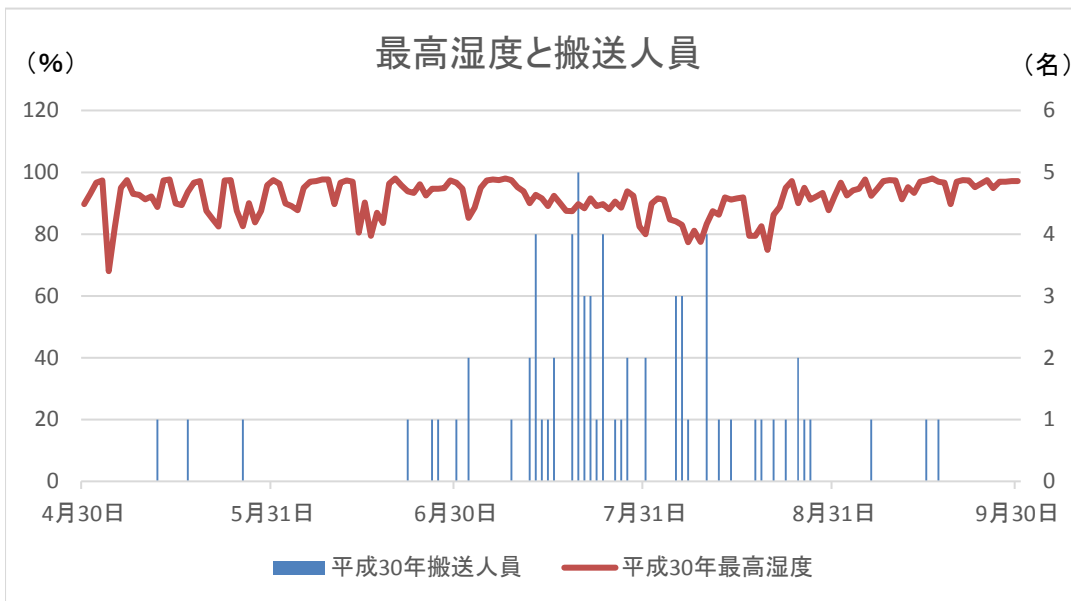
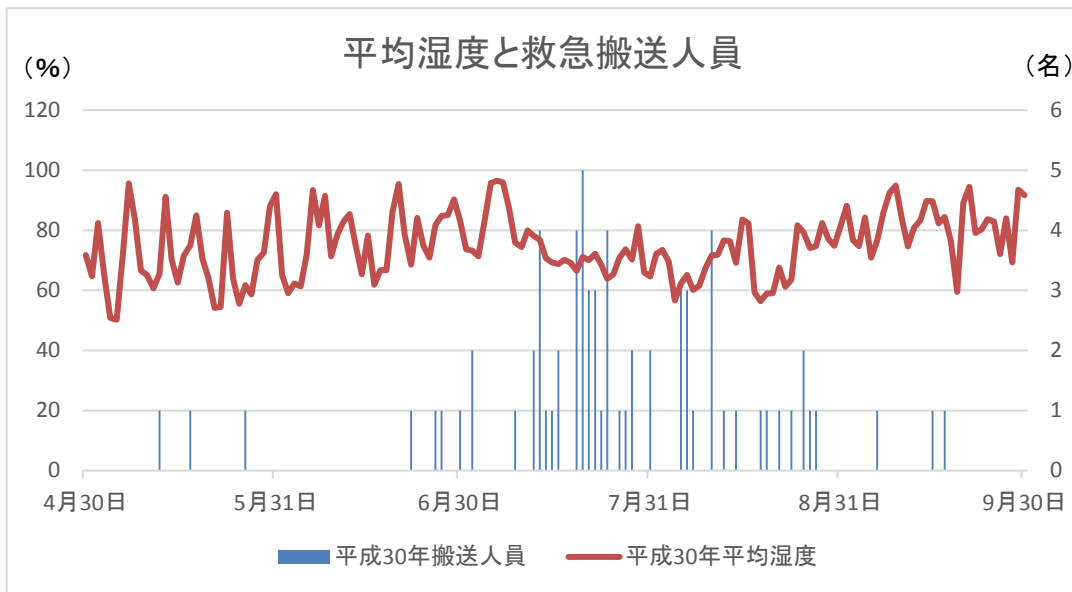
(6) 搬送先医療機関

80%以上の傷病者が、北播磨総合医療センターに搬送されています。



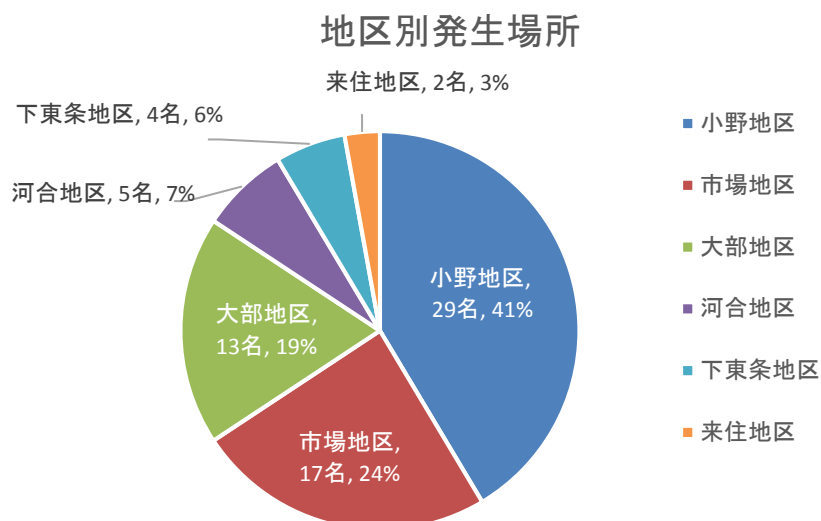
## 5 湿度と救急搬送人員

平成30年の搬送人員と湿度との関連をみると、日中の湿度差がある日に、熱中症の発生が多くみられます。



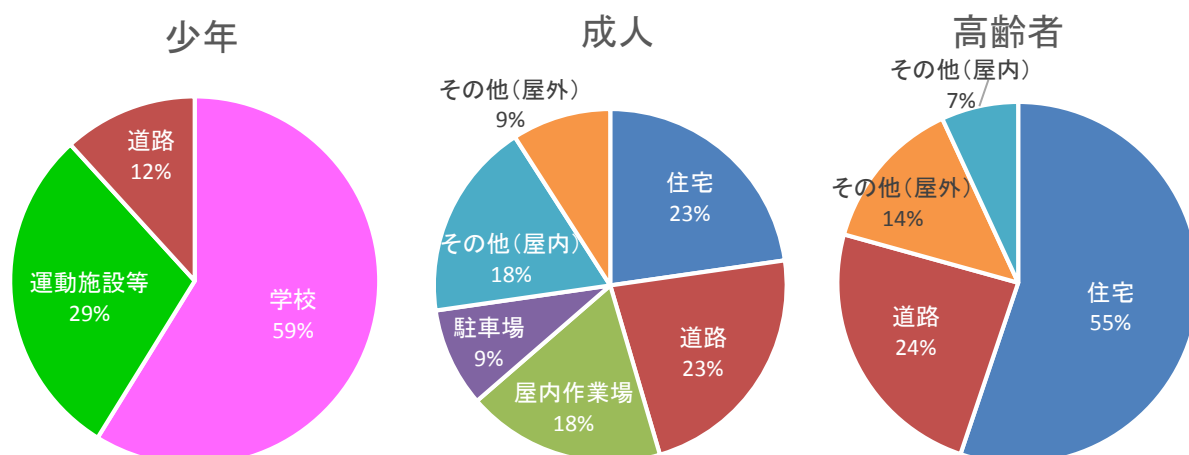
## 6 発生地区と救急搬送人員

小野地区での発生が最多となっています。



## 7 年齢区分と発生場所

少年では、学校や屋外での活動中に発生が多く、高齢者では、住宅での発生が高い割合となっています。



## 8 熱中症予防への取り組み

今年、熱中症による救急搬送は70名で、搬送した方の中で、救急隊接触時に心肺停止状態で、病院搬送後にお亡くなりになられた方が1名おられました。

熱中症を予防するには、こまめな水分補給、エアコン・扇風機を用いた室温調整及び適度な休憩をとることが大切です。今年は、特に気温が高い日中において学校等でのスポーツ中に体調不良を訴える事案が多くみられました。今後の課題として、教育機関等への熱中症予防対策の指導や広報活動の見直しが明確となりました。また、高齢者は暑さを自覚しにくい、喉の渇きを感じにくく、小さな子どもは汗腺が未熟なため、体温調整がしにくいという特徴がありますので、各種関係機関と連携を図りながら各年齢層に応じた講習会を開催し、熱中症の発生を予防いたします。